笠井若林遺跡8次

2005年

(財)浜松市文化振興財団

例　言

1、本書は浜松市笠井町1492－1、1493－1で行われた笠井若林遺跡第８次発掘調査(教文第10437号、平成17年３月31日付指示)の報告書である。

2、調査は中村建設株式会社の委託により、浜松市教育委員会の指導のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施した。

3、調査は以下の体制で実施した。

調査担当者　佐藤由紀男　(浜松市教育委員会生涯学習推進課)

調査補助員　野末亮・戸塚洋輔・原田和子　(浜松市教育委員会生涯学習推進課)

事務担当者　中島陽子・森脇里枝子　(財団法人浜松市文化振興財団)

4、本書の執筆は佐藤由紀男が行った。

5、調査の記録、出土遺物は浜松市教育委員会が保管している。

第１図　笠井若林遺跡の位置

Ⅰ、はじめに

笠井若林遺跡は浜松市笠井町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。本遺跡では県道浜松環状線の建設に伴う調査（1次～3次、5次・6次）や診療所建設に伴う調査（4次）、市道拡幅に伴う調査（7次）などが実施されてきた。そして今回の8次調査はガソリンスタンド建設に伴う事前調査として実施されたものである。

Ⅱ、地理的・歴史的環境

長野県の諏訪湖を源流として遠州灘に注ぐ天竜川は、浜松市鹿島付近より下流では扇状地形の沖積平野（天竜川平野）を形成している。この沖積平野の傾斜は笠井若林遺跡の所在する笠井町付近で緩やかとなり、それから南側は平坦な地形が続く。沖積平野の基盤層としての礫層も笠井町付近までは広範に確認されるが、南側では不明確となる。厳密には笠井町付近が、扇状地地形の末端部分であろう。築堤以前の天竜川は二方原台地と磐田原台地の間で流路変更を繰り返し、網目状に流れていた。その中にあって笠井町付近は広域な微高地を形成し、安定した環境が継続していたと推定される。それは広範な範囲で確認される遺跡のあり方からも伺われる。

笠井町周辺では縄文時代以前の遺跡は確認されていない。弥生時代についても山の花遺跡から前期の条痕紋系土器の小破片が出土しているのみであり、この地区の微高地上に集落などが形成されるのは古墳時代以降のことである。

古墳時代前期では恒武西宮遺跡から方形周溝墓が検出されている。中期では恒武西宮遺跡から竪穴建物が検出され、また多量の木製祭祀遺物などを包含する大溝が山の花遺跡や恒武西浦遺跡で検出されている。蛭子森古墳（第2図4）は平野内に立地する径24mの単独円墳であり、群集墳の被葬者とは隔絶した存在として注目される。また後期の集落は笠井若林遺跡や恒武東覚遺跡・恒武西宮遺跡などで確認されている。

奈良・平安時代の集落は笠井若林遺跡、恒武西宮遺跡、恒武東覚遺跡、恒武西浦遺跡などで確認されている。中でも笠井若林遺跡からは円面硯、獣足付き短径壺、帯金具、緑釉陶器など、官衙的性格を推測させる遺物が出土しており、注目される。

鎌倉・室町時代の笠井町やその周辺には羽島荘、美園御厨といった荘園が成立していた。この時期の集落は笠井若林遺跡、恒武西宮遺跡、恒武西浦遺跡などで確認されている。

Ⅲ、調査の方法と経過

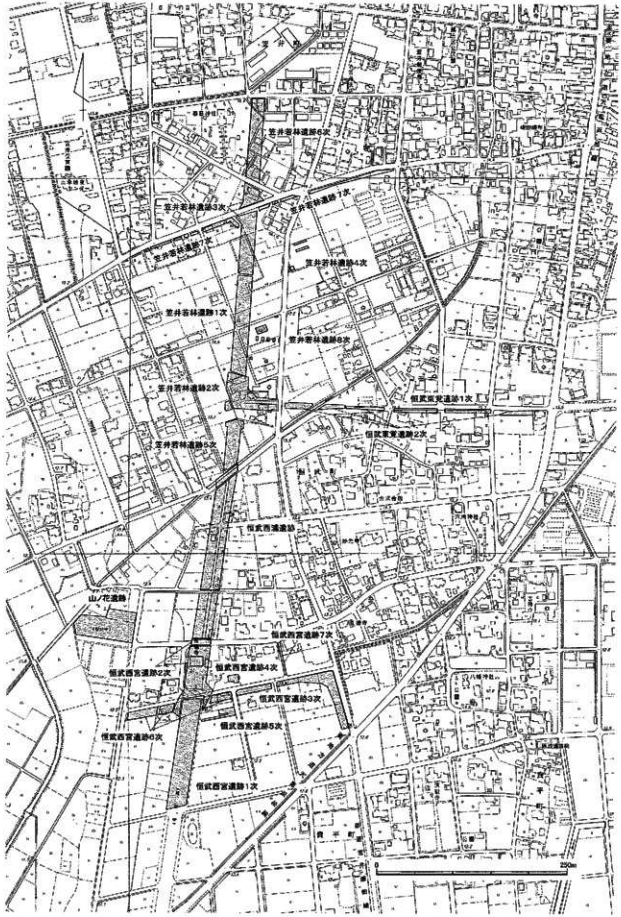
ガソリンスタンド建設に伴う本発掘調査であり、調査対象は工事によって遺跡が消滅してしまう、地下タンクや廃油タンク、油水分離槽の埋設箇所やキャノピー基礎部分の9箇所のみである。それぞれを1区から9区と呼称した（第4・5図）。

隣接する浜松環状線部分の発掘調査で確認された基本層序は、1層・耕作土、2層・暗褐色土、3層・黄褐色土、4層・灰黄色土、5層・礫であった。そして今回の調査で確認された基本層序も同様である（第6図）。環状線部分では標高13.1m前後で鎌倉・室町時代の遺構を検出し、12.9m前後で古墳・奈良時代の遺構を検出していた（静岡県埋文研2002）。そこで標高13.2m付近まで重機（バックフォー）を用いて掘削し、以下人力にて精査（遺構検出）を行いながら5層上面まで掘り下げた。そして検出した遺構は人力にて掘削し、掘り上がった遺構は20分の1の縮尺で図化するとともに写真撮影を行い記録した。図化は調査対象地の北西端の土地境界を基準点とし、西側境界ラインをXY座標の基準ラインとして行った（第4・5図）。標高の基準は環状線調査時の基準点を踏襲した。

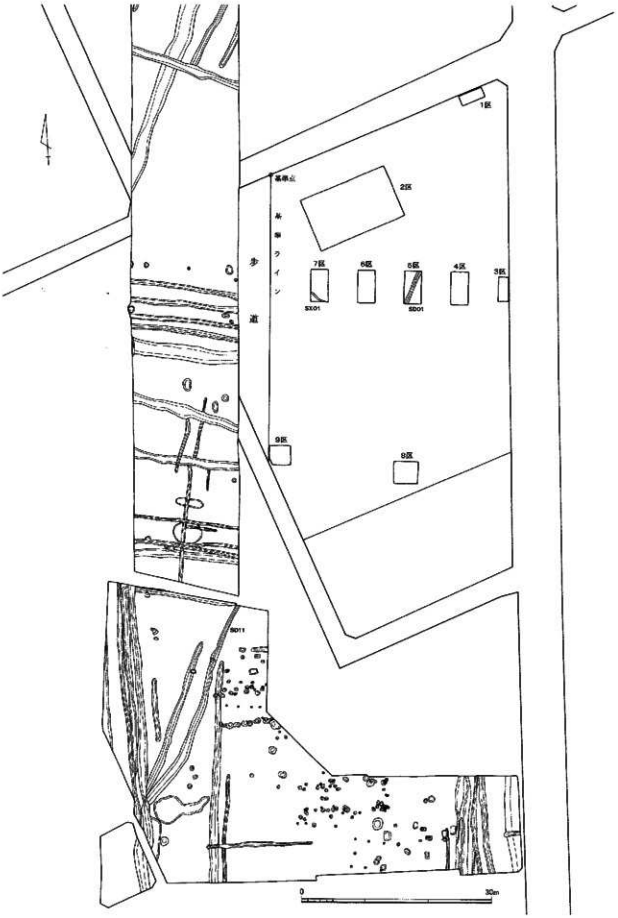
第２図　周辺遺跡図

1．上石原遺跡　2．隋国遺跡　3．八幡西遺跡　4．蜆子森古墳　5．八幡南遺跡　6．服織神社境内遺跡　7．大通西遺跡　8．宮前遺跡　9．御殿山遺跡　10．万斛遺跡　11．笄井町広野遺跡　12．笠井西浦遺跡　13．笠井町下組遺跡　14．八ツ面遺跡　15．平松遺跡　16．社山遺跡　17．茶ノ木田遺跡　18．笠井若林遺跡　19．恒武遺跡群

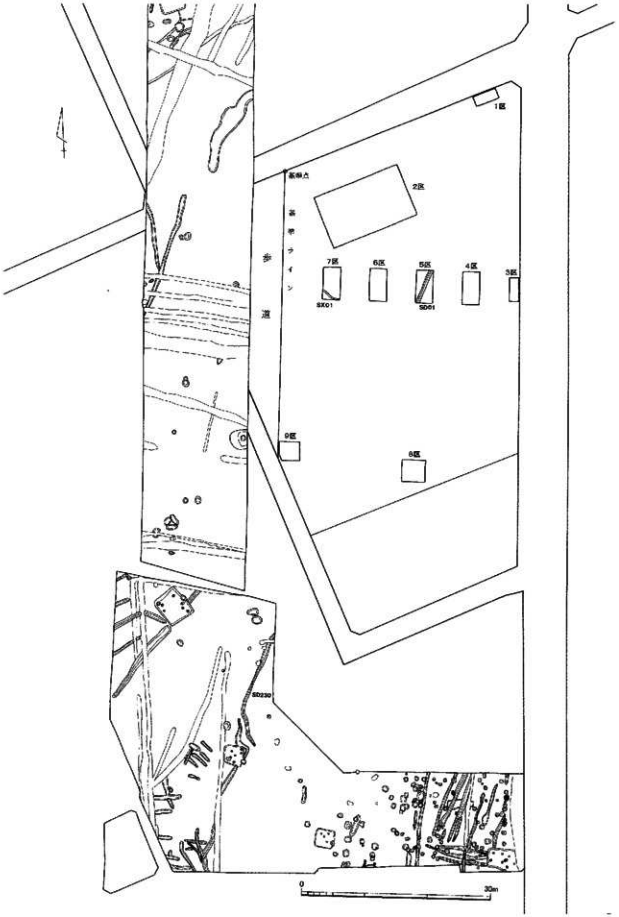
調査は2005年４月18日に開始し、４月26日に終了した。ガソリンスタンド周辺の整備工事と並行して実施したため、工事工程に合わせて３区、１区、４区、８区、９区、６区、５区、７区、２区の順に調査した。４月21日に５区で溝(SD01)を検出し、22日には７区で人形土坑(SX01)を検出した。


笠井若林遺跡6次
笠井若林遺跡3次
笠井若林遺跡7次
笠井若林遺跡4次
笠井若林遺跡1次
笠井若林遺跡8次
笠井若林遺跡2次
笠井若林遺跡5次
恒武宮家遺跡1次
恒武宮家遺跡2次
恒武西遺跡
山ノ花遺跡
恒武西宮遺跡7次
恒武西宮遺跡2次
恒武西宮遺跡4次
恒武西宮遺跡3次
恒武西宮遺跡5次
恒武西宮遺跡6次
恒武西宮遺跡1次
250m

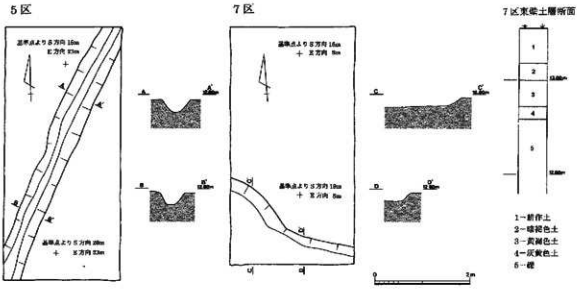
第3図　周辺地形図



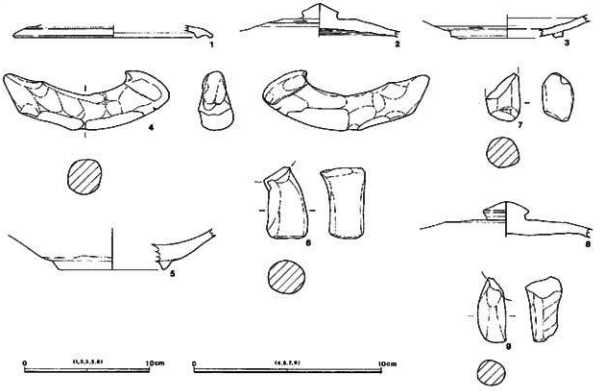
第４図　８次調査全体図と浜松環状線調査区第１面遺構



第５図　８次調査全体図と浜松環状線調査区第２面遺構



第6図　検出遺構と基本層序



第7図　出土遺物

(1～3.SD01　4.2区　5.5区　6･7.6区　8･9.採集)

Ⅳ、調査の成果

＜1区＞

遺構は検出されなかった。遺物は須恵器・土師器の小片と13世紀代かと推定される山茶椀の小片が出土した。

＜2区＞

遺構は検出されなかった。遺物は須恵器・陶器・土師器の小片と馬形土製品(第7図4)が出土した。

＜3区＞

遺構は検出されなかった。遺物は須恵器・土師器の小片が出土した。

＜4区＞

遺構は検出されなかった。遺物は須恵器・土師器の小片が出土した。

＜5区＞(第6図)

溝状遺構SD01を検出した。検出面の標高は12.7m前後である。幅50～65cm、深さ22～30cm、溝内からは第7図1～3の須恵器が出土した。1は7世紀末葉の坏蓋、2は8世紀代の坏蓋、3は8世紀代の盤である。また、3層の黄褐色土中からは10世紀代の灰釉陶器の椀(第7図5)が出土した。

＜6区＞

遺構は検出されなかった。遺物は須恵器・土師器の小片と馬形の脚部と推定される土製品(第7図6・7)が出土した。

＜7区＞(第6図)

大形土坑かと推測されるSX01の一部を検出した。検出面の標高は12.7m前後、深さは18cm前後である。遺構内からは須恵器・陶器・土師器の小片と共に鉄滓も出土した。陶器には平安時代かと推定される小片も含まれているが、時期の詳細は不明である。

＜8区＞

遺構は検出されなかった。遺物は須恵器・土師器の小片が出土した。

＜9区＞

遺構は検出されなかった。遺物は須恵器・土師器の小片と鉄滓が出土した。

なお、第7図8・9は調査対象範囲内で採集した遺物である。8は8世紀代の須恵器坏蓋、9は馬形の脚部と推定される土製品である。

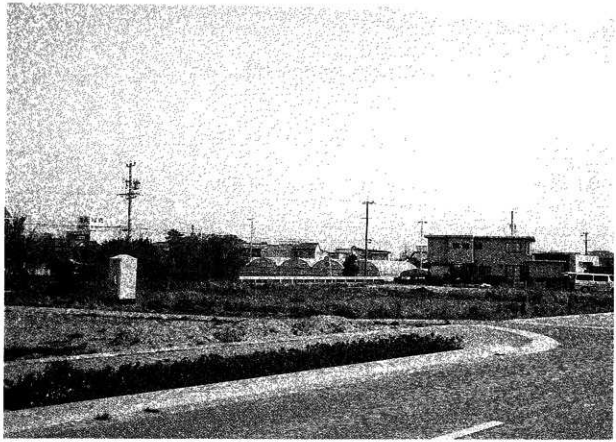
Ⅴ、まとめ

今回の調査で検出された遺構は7世紀末葉から8世紀の溝1条(SD01)と、詳細な時期は不明であるが、奈良・平安時代と推定される大形土坑1基(SX01)のみである。なお、隣接する浜松環状線調査区のSD230からは8世紀代の土器が出土しており、その方向から判断して今回のSD01と同一の溝である可能性が高い(第5図)。

出土遺物では馬形土製品と鉄滓が注目される。浜松環状線調査区の竪穴建物SB220内からは8世紀末から9世紀前半代の精錬炉と推定される遺構が検出されている。

参考文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所2002『恒武西宮遺跡Ⅱ・笠井若林遺跡』
浜松市文化協会2000『笠井若林遺跡4次』
浜松市文化協会2003『笠井若林遺跡7次』



調査前全景

SD01

SX01

出土遺物

報告書抄録

書名(ふりがな)	笠井若林遺跡８次(かさいわかばやしいせき８じ)
編著者名	佐藤由紀男
編集機関	浜松市教育委員会　〒430-0917　浜松市常盤町 306番地の5 イーステージ浜松オフィス棟 電話　053－457－2466
発行機関	(財)浜松市文化振興財団　〒430-7790　浜松市板屋町 111番地の１ 電話　053－451－1113
発行年月日	西暦2005年８月31日
所収遺跡名	笠井若林遺跡(かさいわかばやしいせき)
所在地	静岡県浜松市笠井町1492－１、1493－１番地
コード	市町村コード 22202　遺跡番号10－14
北緯	34度45分30秒「使用測地系　日本測地系(改正前)」
東経	137度47分50秒「使用測地系　日本測地系(改正前)」
調査期間	西暦2005年４月18日～2005年４月26日
調査面積	約220m²
調査原因	ガソリンスタンド建設
遺跡の種別	集落
主な時代	古墳時代後期・奈良時代・平安時代
主な遺構	土坑、溝
主な遺物	須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶椀、馬形土製品、鉄滓
特記事項	なし

笠井若林遺跡８次
2005年８月31日
編集　浜松市教育委員会
発行　(財)浜松市文化振興財団
印刷　東海電子印刷株式会社